



□ 刀我石部神社

僕が生を受けた旧東河村宮集落の西にある宮山に鎮座する刀我石部神社。毎年10月、宮神楽の奉納があり、その年の新生児が仲間入りのお披露目をする。僕も今から70年前、1955年にそこでお披露目された。



ふるさとの光

発見プロジェクト 6紙連携企画

in 朝来市

神戸新聞社をはじめ西日本の6地方新聞社が連携し、地域の資源を「ふるさとの光」と位置付け、魅力を発掘し発信する「ふるさとの光」発見プロジェクト。第2弾は兵庫県朝来市が舞台です。特急はまかぜ、特急こうのとりが停車するJR和田山駅のある同市。映像作家・写真家の藤原次郎さん、富士発條代表取締役社長の藤井啓さん、ひょうご観光本部事業推進部長の安東明美さん、芸術文化観光専門職大学の瀧口凜々子さんが独自の視点で「ふるさとの光」を選定しました。今回は藤原さんが撮影した写真で紹介します。

□ 円明寺



臨済宗妙心寺派の寺で、1400年代に創建された。幼い頃からわが家の菩提寺として親しんできた。山城をほうふつさせるその石垣と手前には池をたたえ荘厳である。幼心より「美しい」と言うよりは「怖い」「物の怪」と言うイメージがあったが、今はそこそが谷崎潤一郎が著す『陰翳礼讃』の世界であり、小泉八雲『ラファディオ・ハーン』が愛する「日本の美」だと感じている。

□ 生野の町並み・鉾山町の寺



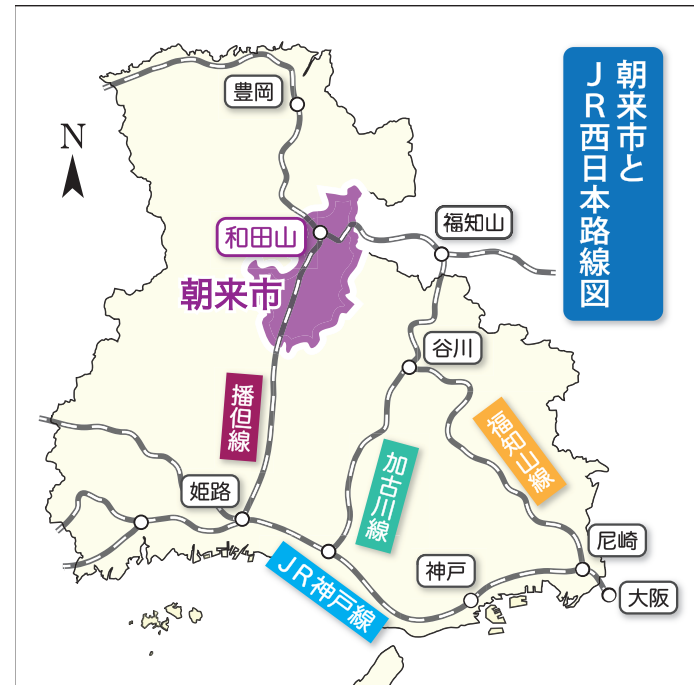
僕はここ生野にある県立生野高校に通った。高校は町はずれにあるので、町並みに触れることはあまりなかった。後年、生野まちづくり工房「井筒屋」再生の映像制作の依頼を受け、この町をじっくり撮ることができた。古くからある山沿いの寺院群、そして明治時代の歴史的建造物。「ヘリテージ」の意味、意義を実感できる。

□ 鉾石の道



神子畑から新井を経由して生野に延びる。1885(明治18)年、生野・神子畑間の鉾石運搬専用道路が開通。馬車道として現在の播但線の脇を通っている。僕は馬車をさすがに見たことがなく、想像しかない。当時、鉄道はイギリス、土木・道路はフランスの技術。特にフランスはナポレオンの騎兵と砲術、大砲などの兵たん移動の要となる道路構築技術は抜きんでおり、世界最新の道路だったと断言できる。

絶え間ない営み、宿る記憶



「ふるさとの光」発見プロジェクトの詳細はこちら



□ 竹田城下町

1960年代、幼い頃はまだ高速道路もバイパスもなく、一般道で祖母が住む神戸へ父の運転する車で行った。竹田の町に入ると、途中で道が大きく曲がっていることが気になっていた。戦国時代、侵入する敵がまっすぐ突入できないようにするものと父は話していた。寺町かいわいが特に好きだ。寺の白い塀と山門、そして水路、浮世絵に出てきそうな松。

撮 影

映像作家・写真家
藤原 次郎さん



ふじわら・じろう 1955年生まれ。朝来市和田山町出身。生野高校、大阪芸術大学映像計画学科卒業。大阪のビデオ制作プロダクション、建築写真会社を経て、2011年に映像作家として独立。日本の芸術的表現の一つである「陰影」をたくみに表現し、自然、造形美、生物・人間の営みを感動的に表現することで、数多くの国内外コンテスト受賞歴がある。現在、妻の故郷でもある大分県に移住し創作活動続ける。

□ JR播但線

母に連れられて神戸の祖母宅に行くときは、播但線を利用した。和田山から姫路までは蒸気機関車けん引の鈍行列車、今は伝説となった峠越えトンネル内の「窓閉めの儀式」、2時間かけ姫路に着くと、当時デビューしたてのピカピカの山陽電車のステンレスカーに乗り換え、窓の外にはモノレールが走る未来都市が広がっていた。地中海のような明るい瀬戸内海を見ながら神戸に向かった。



【主 催】「ふるさとの光」発見プロジェクト実行委員会
(構成＝北國新聞社、福井新聞社、京都新聞、神戸新聞社、山陽新聞社、中国新聞社)
【特別協賛】JR西日本
【協 力】朝来市

(写真は竹田城跡)

